わんりぃ

275号
2022/7

日中文化交流市民サークル‘わんりぃ’
町田市三輪緑山 2-18-19　寺西方
〒195-0055　☎：044-986-4195
http://wanli-san.com/
E メール:t_taizan@yahoo.co.jp

麗江の水路掃除：世界遺産の麗江古城。水路が街中をめぐっていて、散策にはうってつけだ。市街地で迷ったときは水路の上流へ歩けば出発点に戻れる。綺麗な水路を保つため、竿を持った女性がゴミをさらっていた。
（雲南省麗江　2017 年 7 月　撮影：佐々木健之）

‘わんりぃ’ 2022 年 7 月号の目次は 20 ページにあります

「寺子屋・四字成語」雑感-54

门(mén)・可(kě)・罗(luó)・雀(què)

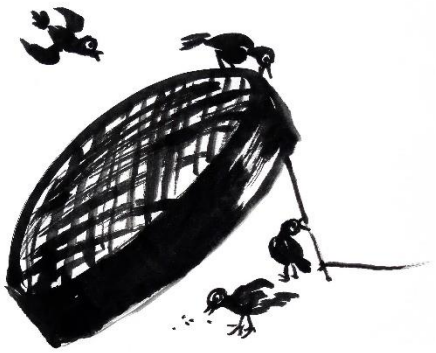
中国で見つけた“有名小学校入学準備の為の”絵本から

文と訳・有為楠君代(ういくす)

日本では「門前雀羅」とか「門前に雀羅を張る」とか言いますが、中国の子供向け絵本では 3 冊のうち 2 冊にしか載っていませんでした。

・➢・➢・➢・➢・➢

昔、鄭庄(ていしょう)という大臣がいました。人柄はとても率直で謙虚で、皇帝のお気に入りの臣下でした。友人も大勢いて、彼の家の前は馬車の往来が引きも切らず、千客万来のにぎやかさでした。



挿絵:満柏画伯

ある時、ふとしたことで皇帝の機嫌を損ねたので、皇帝は怒って彼を罷免してしまいました。その結果、友人知人の往来はぱったりと途絶え、その代わりに雀たちが軒先や地面に群れ遊んで、霞網でも設置すれば一度に数十羽も捕まえられる程の賑やかさです。

暫くすると、皇帝の機嫌も直り鄭庄は復職したので、以前の友人たちが再び、群れを成してお祝いに訪れ、以前にも増して賑やかになり、雀は姿を消しました。

・➢・➢・➢・➢・➢

言葉の意味：門の外に霞網を張って雀をとらえられるほど、人の訪れが少ない。落ちぶれている。

使い方：このホテルは、開業してから随分経つのに、未だに、「門前雀羅」の状況だ。

・➢・➢・➢・➢・➢

元のお話は、「史記」の「汲黯(きゅうあん)・鄭当時(とうじ)列伝」に出てくるお話で、汲黯も鄭庄（庄は当時の字）も武帝の時代の大臣で、似た体験をしています。

つまり大臣の職にある時は、友人も知人も多かったのに、任を解かれると人々は寄り付かなくなり、復職するとまた以前のように人が寄って来るのでした。その変化の様子を描写しています。

このお話では、鄭庄のことを話していますが、違う辞書では同じ言葉の説明で、汲黯のことを話しています。意味はどちらでも同じことです。日本語では、同じことを言うのに「門外に雀羅を設ける」という言い方もします。因みに、雀羅とは小鳥を捕る網、いわゆる霞網のことです。

門前が賑やかになるのも、寂しくなるのも、周囲の人々の、その家の主人に対する思惑が絡む、打算の結果のように思える言葉です。

確かに、人々は権力を持つ人の周りに集まり、機嫌を取ったり頼み事したりするので、その家の主人が好むと好まざるとにかかわらず、人の往来は激しくなりますが、その人の権勢が衰えると、人々は去って行くものです。

しかし時には、自ら人の世の煩わしさを避けてひっそりと暮らすのを好む人もいます。そんな人の家の様子をいうのに「門前雀羅を張る」はふさわしくない気がします。そんなとき、日本には「閑古鳥が鳴く」という言い方があります。

「閑古鳥」とはカッコウのことで、深山幽谷に生息するというイメージと、「カッコー」と鳴く声音が何となく寂しげだからという理由でこう言われるそうです。

しかし、今どきの人々には、カッコウと言えば「托卵」が連想されて、たくましい鳥、ずるい鳥という印象があり、この言葉の昔からの雰囲気を損なっているような気がします。

それでも、「門前雀羅を張る」というよりは「閑古鳥が鳴く」と言う方が、自ら人付き合いを避ける主人に相応しい言い方ではないかと、勝手に考えてしまいます。

因みに、「门可罗雀」の反対言葉には「门庭若市(méntíng ruò shì)」という言葉があり、日本語では「門前市をなす」と言います。以前このコラムで紹介したことがありますが、意味は日中まったく同じです。

日译诗词［漢詩の日本語訳］（24）

韓愈『初春小雨』

桜美林大学名誉教授　植田渥雄

今回は韓愈（768～824）の詩を取りあげました。韓愈は中唐期を代表する詩人で、白居易と共に「韓白」と並び称されました。常に中唐詩壇の中心にいて、盛唐期の李白、杜甫と同様、この時代の詩風を論じる際に欠かすことにできない人物ですが、文学史上は詩人としてよりもむしろ思想家、文章家として名を残しています。当時の文章界では六朝時代の伝統を引く、対句を連ねた〈四・六駢儷体〉（駢文）と称する、華美な文体が流行っていましたが、韓愈はこれに異を唱え、友人の柳宗元と共に、漢代以前の質朴で内容のある文章を奨励し、自らも率先して数多くの名文を残しました。いわゆる古文復興運動です。

この運動は宋代になって高く評価され、韓愈は「唐宋八大家」の筆頭に挙げられる存在となりました。一方、詩の分野では議論文を連ねたような難解な詩が多く、必ずしも一般受けしませんでしたが、中には繊細な感覚で自然界の微妙な変化を詠み込んだ、精緻な作品群も見られます。

今回取り上げるのは、そんな類の作品の一つです。

chū chūn xiǎo yǔ
初春小雨

hán yù
韩愈

tiān jiē xiǎo yǔ rùn rú sū
天街小雨润如酥

cǎo sè yáo kàn jìn què wú
草色遥看近却无

zuì shì yī nián chūn hǎo chù
最是一年春好处

jué shèng yān liǔ mǎn huáng dōu
绝胜烟柳满皇都

＊**初春小雨**＝原題『早春呈張水部十八員外』（早春張水部十八員外に呈す）。張水部は同世代の詩人張籍のこと。南宋末期に編纂された『千家詩』に『初春小雨』の題名で採録され、以来この題名で親しまれている。

＊**天街**＝都の大通り。

＊**如酥**＝油を流したように地面がしっとりと濡れた様。

＊**草色**＝草の緑。＊**遥看**＝遠くからみる。

＊**近却无**＝近づいてよくみると何もない。「却」は逆接または意外性を表わす副詞。かえって～。

＊**绝胜**＝断然勝る。

＊**烟柳**＝霞に煙る柳。または柳絮のこと。

＊**皇都**＝都。王都。

〔訓読〕

初春の小雨

天街小雨潤して酥の如し

草色遙かに看るも近づけば却って無し

最も是れ一年春の好き処

絶えて煙柳の皇都に満るに勝る

皇宮に連なる大通りは初春の雨で油を滲ませたようにしっとりと濡れそぼり、遠くに幻の如く見え隠れする草葉の色は、実際に近寄るとまだ見ることができない。しかしこれこそが一年で最良の時節なのだ。柳絮が王都長安を覆い尽くす春たけなわの時期よりもはるかに素晴らしい。

〔和訳〕

春雨に都大路は濡れそぼり

遠く見る草葉の色は、

近づき見れば未だ無し

これ一年のこよなき処

満城に柳絮飛び交う王都に勝る

腐敗爛熟した時代の中心に身を置きながら、作者は秘かに新しい時代の到来を夢見ていたのでしょうか。

ただ残念なことに、この翌年、作者は57歳で世を去りました。

杜甫の『贈李白』

報告：花岡風子

今日のお題は杜甫の『贈李白』でした。

李白と杜甫という、唐代を、いや古今を問わず中国詩の世界を代表する二大詩人は、洛陽で出会い、わずか二年足らずの短い間ですが、同じ時を過ごしました。二人が魯城の石門（今の山東省）で別れた後、杜甫は李白のことを詠んだ詩を 15 首残しています。それに対して、李白が杜甫を詠んだのは２首だけでした。「天才同士であっても 10 歳年上の先輩って輝いて見えるものなんですね。杜甫にとって李白はいつまでも輝く存在であったようです」と植田先生。杜甫は李白より 11 歳年下ですから、後輩の方から先輩を讃える詩をたくさん書くのは自然の成り行きだったようです。ちなみに李白は 13 歳年上の孟浩然に関する詩を何首か残していますが、一方、孟浩然が李白のことを詠んだ詩は見当たらないそうです。

さて、二人が出会ったのは、李白 44 歳、杜甫 33 歳という、当時の感覚としては、決して若くはない年齢でしたが、玄宗皇帝に憧れ、何がなんでもその側近として仕えたいと願っていた当時の杜甫にとって、玄宗の膝下で宮廷詩人として活躍した経験を持つ李白との出会いは如何に大きなものであったかが想像されます。性格から詩風まで対照的な二人でしたが、昼夜を問わず酒を酌み交わし、大いに語り合ったであろう、その雰囲気は現代の私たちにも伝わって来ます。性格や詩風だけでなく、生まれも育ちも全く違う二人。李白はシルクロードを往来する行商人の家庭に育ち、自身異民族の血を引いているとも伝えられます。かたや杜甫は儒家の名門家庭で育っています。いずれ劣らぬ酒豪だったことを除けば、何もかもが正反対の二人です。

李白は若い頃から神仙思想に傾倒していました。この詩には晋の葛洪という人物の名前が出てきます。まるで蝉が殻を脱ぐように、肉体を離脱するという「尸解の術」ができたと言われます。李白が憧れてやまなかった人物です。杜甫も李白の影響を受けて、一度は神仙思想に憧れてはみたけれど、儒家の理想主義は捨てきれなかったようです。

zèng lǐ bái
贈 李 白

dù fǔ
杜 甫

qiū lái xiāng gù shàng piāo péng
秋 来 相 顧 尚 飄 蓬
wèi jiù dān shā kuì gě hóng
未 就 丹 砂 愧 葛 洪
tòng yǐn kuáng gē kōng dù rì
痛 飲 狂 歌 空 度 日
fēi yáng bá hù wèi shuí xióng
飛 揚 跋 扈 為 誰 雄

李白に贈る

秋来相顧(あいかえり)み尚お飄蓬(ひょうほう)たり
未だ丹砂(たんさ)を就(な)さずして葛洪(かっこう)に愧(は)ずず
痛飲狂歌空(つういんきょうかむな)しく日を度(わた)る
飛揚跋扈(ひようばっこ)誰(た)が為(ため)にか雄(ゆう)なる

秋を迎え、お互いのこれまでの短い付き合いを振り返ると、私はまだ根なし草のように旅を続けている。恥ずかしながら、不老長寿の仙薬を作った葛洪のようにはなれず、酒を飲んで詩を作っては、空しく日を過ごしている。諸国を股にかけ、英雄気取りでいるけれど、こんな自分が一体誰のためになっていると言うのだろう。

もう少し語句を詳しくみてみましょう。

飄蓬(ひょうほう)の「蓬」はヨモギと訓読みしますが、日本のヨモギと違い、砂漠の中を球形になって丸ごと風に乗って転がっていくという種類のもので、さすらいの旅人をイメージする言葉です。丹砂(たんさ)というのは、道士

が水銀とか金とかを混ぜて作った薬のことです。水銀は今では毒だと知られていますが、その昔は不老長寿の薬だと信じられていました。秦の始皇帝も水銀中毒で死亡したと言われています。葛洪とは晋代の人。有名な『抱朴子』の著者で、尸解(しかい)の術を会得して自ら天に上ったとされる人物です。

痛飲狂歌とは四字熟語にもなっている表現です。杜甫は李白のことを“李白一斗、詩百遍”と半ば驚嘆して表現しましたが、飲んでは詩がドンドン出て来るさま、または、大いに飲んで大いに歌っている様子としても使えます。酒量においては杜甫も李白に負けなかったようです。

「この詩は非常に分かりにくいですね。杜甫が痛切に自らを批判しているようでもあり、一方、自らの才能を持て余して風来坊のような生活を続ける李白への風諭とも取れます。杜甫は李白の生き方を究極の所どう思っていたのだろう？ と考えさせられる詩ですね」と植田先生。

それにしても最後の一句、痛烈な自己パンチですが、これを李白に贈った時の杜甫の心境はどんなものだったのだろうかと、気になります。

さて、一方、李白が杜甫に送った二首のうちの一首はこちらの作品です。比べて鑑賞してみましょう。

lǔ jùndōng shí mén sòng dù èr fǔ
鲁郡东石门送杜二甫

lǐ bái
李白

zuì bié fù jǐ rì
醉别复几日

dēng lín biàn chí tái
登临遍池台

hé shí shí mén lù
何时石门路

chóng yǒu jīn zūn kāi
重有金樽开

qiū bō luò sì shuǐ
秋波落泗水

hǎi sè míng cú lái
海色明徂徕

fēi péng gè zì yuǎn
飞蓬各自远

qiě jìn shǒuzhōng bēi
且尽手中杯

ろぐん　ひがしせきもん
魯郡の東石門にて杜甫を送る

すいべつ　ま　いくじつ
醉別復た幾日

とうりん　ち　だい　あま
登臨池台に遍し

いず
何れの時か石門の路

きんそん　ひら
重ねて金樽を開くこと有らん

しゅうは　しすい
秋波泗水に落ち

かいしょく　そらい
海色徂徠に明らかなり

ひほうかくじ
飛蓬各自遠し

しばら　しゅちゅう
且く手中の杯を尽くさん

「重厚な言葉を連ねている割には軽めの内容ですね」と植田先生。池台とは池に張り出したテラスのことで、そんなところをあちこち飲み歩いて何度もお別れパーティーをしたということのようです。「そんなに何日もかけて送別の宴を張るものなのでしょうか。時代は下りますが『水滸伝』には送迎の宴ごとに30日間も酒盛りを続けたという記載があります」と植田先生。今の感覚では「え？ 30日も？」と思いますが、その時代に思いを馳せてみますと、人々は短命ですし、いつどこでどんな命の危険があるかもしれないし、交通も不便だから一度別れたらもう二度と会うことはないのが当たり前だったのですよね。日本では昔「水杯を交わす」なんてことをしたらしいですが、この二人の交わす杯の中身はやはり水というわけにはいかなかったようですね。これが文化の違いというものでしょうか(笑)。

いつかまたこの石門の地で再び共に酒杯を傾けることがあろうか。泗水の川面は秋風に波立っている。徂徠山(そらいさん)の遙か東方は海の色を映したように白んで見える。二人は夜明けまで飲み続けたようです。「俺たち二人はこれから別れ別れになって流浪の旅を続ける。今しばらく手元の酒を飲み干そうではないか」と。友情溢れる李白らしい惜別の詩ですが、杜甫の『贈李白』のように相手の心に訴えかけるような内容ではありません。二人が書いた別れの詩は互いの性格や立場を反映してか、やはり見事に対照的です。

結局、この後の人生、二人は二度と会う機会がありませんでした。

河南省或いは「中原」雑感―(23)

河南省をめぐる友好提携都市（つづき）

文と写真＝村上直樹

河南省をめぐる友好提携都市について今回は一覧表（１月号）の最後、16番目にある熊本県小国町（おぐにまち）と河南省鄭州市登封市との関係である。登封市と言えば、達磨（だるま）（達摩）が中国禅宗を開祖した嵩山（すうざん）少林寺があることで広く知られている。そして、嵩山少林寺と言えば、少林武術である。予想どおり、この友好提携関係は少林武術を縁としている。

一般財団法人・自治体国際化協会（クレア）の「提携情報」によると、1956 年より小国町の住民が少林武術の普及に努め、1993 年には中国の少林武術公演が小国町で行われ、1997 年から中国へ武術研修のための派遣が始まったとある。両者の提携が成ったのは 1998 年 3 月である。提携の契機としては④市民交流によるもの、になろう（契機の分類は 3 月号を参照してほしい）。

なぜ、1956年というかなり以前に小国町で少林武術の普及が始まったのか、その理由はわからなかったが、小国町の広報誌『おぐに』の2017年9月号には、7月24日から31日にかけて、第15回日本少林武術学校が開かれ登封市の河南省嵩山少林寺武術館から招聘した海源超氏の指導のもと、約40名の子供たちが少林武術の習得に励んだという記事が出ていた。少林武術を通じた交流が続いていることがわかる。

同記事にある「河南省嵩山少林寺武術館」に、私は 2013 年 12 月 1 日に実際行ったことがある。世界文化遺産・全国重点文物保護単位・国家５Ａ級旅游景区の嵩山少林寺を見学し、この武術館では 30 分間ほど少林武術の実演を鑑賞した。近年、中国政府は少林武術の国際的な普及に力を入れており、1988 年に開館したこの武術館はそのための中心的役割を担っている。2011 年には同武術館によって「国際少林武術家協会」なる団体も設立された。

ところで、（おそらく）お恥ずかしいことに、嵩山少林寺の僧侶が修行するのは少林武術あるいは少林拳であり、「少林寺拳法」はそれとは別の日本発祥の武術であることを、私はごく最近偶然知った。6 月初めに旅行で四国の道後温泉と大歩危（おおぼけ）を巡ったのだが、移動途中の乗換駅「多度津」（香川県）で少し時間があったので、周辺に何か観光名所はないかと探すと、多度津町観光協会の公式 HP で「少林寺拳法発祥のまち『金剛禅総本山少林寺』」のコピーを見つけ、少なからず驚いた（写真は現地で撮った）。

金剛禅総本山少林寺・香川県（2022年6月撮影）

一般社団法人 SHORINJI KEMPO UNITY の HP によると「少林寺拳法」は、宗道臣（そうどうしん）という日本人が嵩山少林寺で見た壁画に感動して 1947 年に考案したもので、中国の少林武術（少林拳）とは目的も技法体系も異なっているそうである。嵩山少林寺が世界規模で知的財産権保護活動を展開する中でも、互いの存在を認め合い、個性と特徴を尊重しあう良好な関係が結ばれている、とも明記されていた。喜ばしいことである。

武術やその団体・組織について全く知識のない私には、とても、これ以上筆を進めることはできないが、「日本嵩山少林拳連盟」という団体が活動しているほか、2020 年には「河南省嵩山少林寺武術館日本分館」も設立され、「河南省嵩山少林寺武術館」認可の昇級審査が受けられるそうである。

さて、ここまでで「河南省と日本の友好提携都市リスト」（1月号）に掲げた 16 の組み合わせ（河南省と三重県、を含む）の紹介が終わった。このリストは「クレア」による、日本の各自治体が提携関係を結んでいる全世界の都市を整理した膨大なデータから河南省関係だけを抜き出したものである（検索機能によりアッと言う間にできる）。

「雑感」3 月号でも記したが、「クレア」では日本側の自治体において次の 3 つの条件を満たしている

ものを友好都市と定義している。① 両首長による提携書があること。② 交流分野が特定のものに限られていないこと。③ 交流するに当たって、何らかの予算措置が必要になるものと考えられることから、議会の承認を得ていること、である。

「クレア」自身も認めているように、交流というものは、そもそも定義づけになじまない。都市間の友好関係も多様であり、両国のそれぞれの都市によって受取り方が異なるかもしれないと考え、自分でももう少し調べてみることにした。とは言っても、日本の市区町村は 1,700 以上あり、他方、河南省には地級市の下の県市区が 158 もあるため（2020 年末時点）、それらについて１つ１つ調べるのは不可能である。そこで、まず河南省の 17 の省轄市について関連情報を集め、それを日本側の自治体の情報と付け合せる形で確認することにした。

最初に見つけたのは、「クレア」のリストで草加市との友好都市関係がわかっている安陽市の人民政府公式 HP に掲載されていた「国際友城日本小田原市関心馳援我市疫情防控」（国際友好都市である日本の小田原市は、我が市の新型コロナ対策を急ぎ支援すべく心にかけている）という見出し記事である（2020年2月7日付け『安陽ネット』）。神奈川県小田原市が安陽市の国際友好都市であるとは、「クレア」のリストにはなかった。

小田原市役所の公式 HP を確認すると、海外姉妹（友好）都市として米国とオーストラリアの都市が1つずつ挙がっているだけで、やはり安陽市は出ていない。そこで、市役所の文化部文化政策課・文化交流係に直接電話をしてみると、すぐ話が通じ、安陽市とは市として正式な提携関係は結んでいないが、市内の「西湘日中友好協会」が中心となって、子供たちの書画展の開催など、民間レベルで交流を続けているとのことであった。「西湘日中友好協会」が安陽市の関係者を招聘した際には、市役所を訪問することもあるらしい。早速、「西湘日中友好協会」の Facebook 記事を確認すると、日中国交正常化50周年の記念行事など、安陽市との交流が活発であることがわかった。

つづいて、「クレア」のリストでは日本に友好都市は無いはずの商丘市（地級市の１つ）について『百度百科』の記述では、国際主要友好城市として札幌市の名が挙がっていた（締結は 1986 年とある）。河南省商丘市は商（殷）の都であった時期もある重要な古都で、商人・商品・商業の発祥の地として知られる。札幌市総務局・国際部交流課に電話をして確認すると、札幌市は中国では遼寧省瀋陽市と友好関係を締結しているとのことで、商丘市の件は了解していなかった。

北海道庁の公式 HP 内には「北海道・中国交流デジタル資料館」というページがあるので、念のため検索してみると、やはり、商丘市と札幌市の関係は出て来なかった。しかし、さらに検索を進めると「2005 年 9 月弟子屈（てしかが）町と河南省商丘市等との交流開始」という記事に行き当った。日中両国語で書かれた覚書も添付されている。弟子屈町は、摩周湖、硫黄山、屈斜路湖、川湯温泉などを有する北海道有数の観光のまちである。もしかすると、『百度百科』は札幌市と弟子屈町を取り違えたのかもしれない。いずれにしても、先の3条件を満たしていると思われる関係がなぜ「クレア」のリストから漏れたのか、謎である。

両都市の提携の経緯については、2013 年の弟子屈町のある文書によると、2005 年 5 月に、当時、愛知県で開かれていた日本国際博覧会（愛知万博）に参加するため来日していた呉儀副首相（中国のサッチャー！）と王毅駐日大使（現外交部長）が弟子屈町を親善訪問したのをきっかけに、「弟子屈日中友好協会」が設立され、商丘市をはじめとする中国の 3 つの都市との提携が実現したとのことである。

1990 年代はじめ、私は 3 年ほど釧路市に住んでいたことがあり、弟子屈町にも観光で何回か行って、いろいろ思い出がある。他方、商丘市には 2006 年 12 月、短期間開封市に滞在していた折、日帰りで訪れた。写真はその時撮った懐かしい商丘駅である。

（つづく）

商丘駅・河南省商丘市（2006年12月）

中国の面白い神話物語・伝奇物語（16）－李娃伝（中 2)―

顧 傑

「李娃伝」の三回目です。

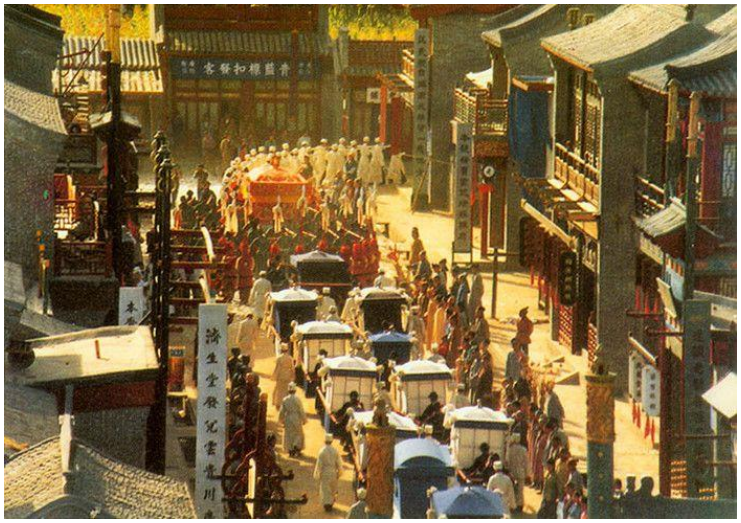
前回までのお話はいかがでしたか。

公子は、父親が持たせてくれた全財産を李娃のために使い果たし、挙句の果てに捨てられてしまいました。一文無しになった公子はどうなるのでしょう？

～～～～～～～～～～～～～～～

公子は全財産を使い果たした後、李娃一家に捨てられた。

無一文になり、どうすることも出来ず、何の目的もなく町の中をさ迷い歩いていた。食べるものもほとんどなく、とうとう重い病気に罹ってしまった。もう手も挙げられなくなった公子を気の毒に思い、手を差し伸べてくれたのは、町の小さな葬儀屋の店主だった。



古代中国の葬式（有名人/官僚）「中原葬儀」より

店の人は毎日の食事を少しずつ取り分けて、薬を混ぜて公子に与えた。すると、数日後には目を開けられるようになった。さらに一週間後には、杖を使いながらようやく立てるようになった。

すると店主は、葬式がある度に、飾り旗など掲げて立つなど、簡単な仕事を与えてくれるようになった。ほんの僅かだが、生きるための収入が得られるようになった。

数か月後、公子は薬代や病気だった時のお礼もきちんとできて、体もだいぶ回復した。

しかし葬式で送別の歌を聞くと、また心の闇に落ちてしまって、涙がとめどなく流れるのだった。体は癒えても、心の傷が癒えることはなかった。

それでも、聡明な公子は、時間が経つうちに、葬式で歌う送別の歌を習得し、葬式で歌うようになった。切々と歌う送別の歌には、公子の心の中の悲しみがにじみ出たようで、人々の心をとらえた。

いつの間にか、長安の都の中でも、送別の歌で公子の右に出る者はいないと言われるほどになった。

町には、東と西に大きな葬儀屋が二つある。東の店は立派な道具で勝負をしており、お客様の要望があれば、金で作った馬や宝石で作った果物など、何でも提供できた。

しかし送別の歌だけは西の店にかなわなかった。東の葬儀屋の店主は、公子の噂を聞きつけ、二万銭で公子を雇い、密かに訓練を始めた。

それから何カ月かが過ぎた頃、東と西の葬儀社が、市場近くの広場で内覧会を開くことになった。そこで観客を満足させた方の店が、賞金の５万銭を得ることができるのだ。

町で最大級の店同士の戦いなので、当地の政府だけでなく、省の長官にまで通知が行った。そして当日、町中の人ほぼ全員が広場に集まり、一万人もの人が集まる一大イベントとなった。

二つの葬儀社は、朝から次々と葬儀道具を展示した。豪華なものもあれば、一般人向けの手軽のものもあった。各階層の葬式だけでなく、普段の居間に飾りたくなるような絵画までもが展示された。しかし道具だけでいえば、西の葬儀社はどうしても少し負けている。

そこで西の葬儀社の店主が部下に頷くと、上背が２メートルもありそうな大男が前に出てきた。黒い髭は腹まで垂れていて、手にも持った鈴を振る度に一緒に舞っているようだ。黒い髭の大男は一歩前へ進み、「白馬歌」を歌った。それを聞いた人たちは誰

もが拍手をした。

大男は得意げに東の方へ目をやると、そこには見たことのない青年が立っていた。青年は黒い頭巾を被っている。葬式用の大きな扇子は、青年の歩みに合わせて、霊を招く手のように動いている。青年は舞台の中央で止まり、服を整えたが、声は出さなかった。西の大男に送られた盛大な拍手がようやく落ち着いたところで唇が動いた。

青年の声は澄みわたる川のようで、風のない森に音を運んでいく。しかしなぜか、その声の中には無限の悲しみが潜んでいるようで、それを聞いた人の頬からは、知らず知らず涙が伝い落ちるのだった。そして気づいたら西の大男はいなくなっていた。恥ずかしくなって逃げた出したのだろう。

一方、当時、各地方の官僚が毎年皇帝に直接報告する「入計」というシステムがあった。その報告のため、ちょうどこの時、公子の父親もここに滞在していた。葬式のイベントと聞いて父親は同僚達と一緒に私服に着替えて出かけた。年老いた下僕が一人同行したが、東の店の青年の歌を聞いた下僕は、それが公子であるとすぐに分かった。

公子が無事だと知った下僕は、安堵すると同時に、公子が音信不通になって以来心にたまっていた感情が一気に涙となって迸り出るのだった。

それを見て公子の父親が驚いて理由を訊くと、下僕は、

「あの歌手は、どうもあなた様の死んだと言われた公子にとても似ているのです」と答えた。

公子の父親はそれを聞いて

「そんなはずはない！ 我が息子は盗賊に殺されたはずだ」

と言った。そういう父親も、先ほどの公子の歌を聞いて、感動の涙を流しているのだった。

イベントが終わり、宿に戻ってきた下僕は、やはり気になって独りで東の葬儀屋へ出かけて行った。そこで下僕は公子の同僚たちに対して、

「先程歌を歌った人はどんな人ですか？ きっと何年も練習を積んだんでしょうね」と訊いてみた。

すると同僚たちは、

「いいえ、最近ようやく回復したばかりの病人ですよ」と答え、公子の経歴を話した。

下僕はその話を聞くと、ゆっくり公子へ近づき、指で黒い布をめくり上げた。

公子は下僕の顔を見ると、顔色を変えて、同僚の後ろに隠れようとした。

下僕は公子の裾を掴んで、

「あなたは私のことを御存知でしょう？あなたは私のご主人ですよね！」

と涙を流しながら言った。それを聞いて公子も涙を流し、下僕の手を握った。

そのあと、下僕は公子を父親の元へ連れて帰ったが、父親は怒りを爆発させた。

「まさかここまで落ちぶれていたとは！お前は私の顔に泥を塗ったのだぞ！こんなことなら、いっそのこと盗賊に殺されていた方がよっぽどマシだった！」

父親は公子を庭へ連れ出し、服を脱がせて、気絶するまで馬用の鞭で何百回も打ち据えた。気絶した公子を見て、父親はやっと鞭を捨て、部屋に戻っていった。葬儀屋の店主は、せめて公子を埋葬してやろうと思って公子を連れて戻ったが、まだ微かに息をしていると分かったので、一晩中寝ずに看病してやった。

公子は朝になってようやく目を覚ましたが、適切な処置をしなかったために、鞭で打たれたところが化膿し始め、日が経つにつれて、傷口から悪臭が漂うようになってきた。

それを見た店主は、これ以上面倒を見切れないと思い、公子の同僚みんなが寝ている間に、公子を連れ出し街なかに置き去りにしてきてしまった。

こうして、順調に軌道に乗るかに見えた公子の生活はまた壊され、物乞いをして生きる日々に逆戻りしてしまった。

そうこうするうちに季節は巡って、厳しい冬がやって来た。

～～～～～～～～～～

今回のお話はここまでになります。

心と体に二重の苦しみを背負った公子は、厳しい冬に向かってどうなるのでしょうか？

次回が最終回になります。お楽しみに！！

（続く）

「秦皇島」をご存知ですか？……(16)

文と写真　吉光　清

先日、新百合ヶ丘の、とある地下の食品売り場で「ドリアン」を見かけた。すぐに買う気を起こす値段ではなかったが、東南アジアに出掛けない限り、目にすることも無かった果物が、こんなに身近で、商品として売られるようになったことは驚きでしかない。

ウイキペディアに拠れば、ドリアンはアオイ科ドリアン属に属する樹木種の総称で、その果実もドリアンと呼ばれる。マレー半島が原産地で、ボルネオ島やスマトラ島などにも自生している。高さが 30 メートルにもなる常緑樹（果樹園では 10 メートル程度）で、その果実は卵型あるいは丸形、大きさは長さ 30 センチ、直径 15 センチ、重さ１～３キロほどになる。外皮は革質で全体が硬い円錐形の棘に覆われている。内部は５室に分かれ、各室に２～３個の種子がある。食用部は種子の周りのクリーム状の部分で、種子の食用は地元を除けば一般的ではない。インドネシア、タイ、マレーシアの各国には何百という品種があるが、栽培され、国際的に流通しているのは一つの品種（Durio zibethinus）だけである。

ドリアンと言えば、その濃厚で豊饒な味覚や優れた栄養価から「果物の王様」、一方では、強烈な匂いや棘だらけの外観、そして人々を虜にしてしまうことから「悪魔の果物」とも呼ばれる。「果物の女王」と呼ばれるマンゴスチンが嫌いと言う人にはお目に掛かったことが無いが、王様の方は、人により好き嫌いが激しく分かれ、食する以前に、悪臭（？）に打ちのめされ、絶対に受け付けない人もお見受けする。

筆者は家族旅行で訪れたシンガポールで、家族を置き去りにして、屋台街に出掛けて食べたのが初めてのドリアンであった。幸いにして、匂いを気にする余裕も無く、食べてしまった。もちろん、美味しかったのだが、噂でしか知らなかった果物を口に出来たという感動の方が大きかった。

■晩秋のドリアン

暖房が入った 11 月中旬、６月号で取り上げたスーパーの果物売り場に、大きな２個のドリアンが陳列された。晩秋に出現した灼熱の国の果物に少々面食らった。

美味しそうなドリアン

処理済みのパイナップル

しかし、輸入と物流のシステムが整備されれば、当地の季節とは関係なく、いろいろな国の農産物が売り出される筈で、考えると何の不思議も無い。

ドリアンの輸出量が最も多いのはタイであるが、インド南部、フィリピン南部などと並んで、海南島もドリアンの栽培可能地域になっているので、そこから輸送されて来た国産品という可能性もあった。

さて、件のドリアンであるが、一個、丸ごと買う勇気はなく、当日は眺めただけで帰ったが、数日後に「室」ごとに区分けされたパックになって売られていたので、喜んで購入した。筆者も悪魔に魅入られた一人なのである。48 元だった。

匂いを撒き散らさないように、ザックの中に厳重に閉じ込め、自転車の荷台に乗せて部屋に持ち帰って、３年ぶりの味を堪能した。林檎の大きさとくらべると、ドリアンはやはり大きい（上の左の写真）。

2016 年９月から４か月間の滞在中に、このスーパーを週に１度くらい利用したが、売り場で購入した青果を撮影した写真が他に２枚ある。そのうちの１枚はパイナップルである。珍しくもなくなった果物だが、ここでは、購入した（6.5 元）後で希望すれば、食べる前の処理が面倒な、松笠のように硬く盛り上がった外側を特別な道具で除去してくれた。表面は月面のクレーターのようだった（上の右の写真）。

もう１枚の写真はエリンギであるが、当地の野菜は日本と比べて総じて大振りであるが、際立っていたので写真に撮った。一緒に写ったミカンは通常サイズなので、エリンギの大きさが理解されよう。味は普通だったが、大きなことで特別な料理に使われることでもあるのだろうか？（次ページ上の左の写真）

■宁海道の向こう側も歩く

交差点付近の宁海道は片側３車線の車道と歩道を

無駄に（？）大きいエリンギ

お馴染みのキャラクター

フタが開いたマテ貝

茹で上がったカニたち

持つ広い道路で、簡単に道の反対側に渡ることは出来ないので、商店は並んでいても繁華街という雰囲気はない。大通りから脇道を一本入ると、途端に道路は狭く、未舗装の場所もあり、降雨の後は水溜まりが出来た。そんな道を自転車で走ると、揺れが激しくなるが懐かしい気持ちになった。子ども連れの家族を客として呼び込むべく、お馴染みのドラえもんが客寄せをしている餐厅があった（上の右の写真）。

眉を顰めたのは、いつも通る病院入り口の真ん前にゴミの集積所があり、飲食店からの生ゴミが山積みされ、汁が道路に流れ出ていることであった。見るたびに閉口したが、年末近くの或る日、清潔なコンクリート製の置き場に変わっていてビックリした。

宁海道の向こう側も歩いて見た。宁海道から左折する「新裕路」はホテルの前に突き当る T 字路になっていたが、集合住宅が道路に面し、スーパーや飲食店が密集し、丁度良い道幅のせいもあって、生活感を感じられる通りだった。

そこから裏通りを歩いて帰ろうとしたが、塀に囲まれた未舗装の狭い道が続き、見通しが利かず、まるで迷路のようだった。塀の内には、宿泊施設、団地、工場があるようだった。道端に残った、わずかな空き地に植えられているエダマメを見た。日本の農村の原風景として、田んぼの畦道にエダマメが植えられていたものだが、現在はどうなっているだろうか？などと考えた。

方角も考えず歩いていたら、造成中の「听濤公园」に行き着いた。公園の南端は戴河大街に接していたので、そこから道沿いに交差点方向に引き返した。

■「南戴河海滨市场」の楽しみ

南戴河医院前から 22 路の路線バスで「北戴河鉄道駅」方向に停留所を二つ進んだところに、「南戴河海浜市場」がある。青果、精肉、鮮魚、生きた鶏などが売られていて、そこで買った魚介を調理（単純過ぎる？）して食べるのは大きな気晴らしになった。

市場で買い物をするといっても、値段の交渉はおろか、要望を伝えることもままならないので、手元にメモ書きを準備して指し示すことにした。

最初に出掛けたのは９月中旬、朝の８時前に着いたが、すでに殆どの店は営業を終了した後で閑散としていた。それでもカニや貝を扱う店が２、３軒、開いていたので、そのうちの１軒で見たシャコを買った。曖昧なやり取りの後で、水槽から掬い上げて秤で測った分を 50 元で引き取った。戻って数えたら、30 匹以上が動き回った。中華鍋で塩茹でにして食べたが、勿論、最高の味で、残りは夜に白酒の肴にした。

10 月末に出掛けた時は、ワタリガニと小さな帆立貝のような二枚貝とを合わせて 50 元で買い取った。

秋も深まった 11 月には２度出掛け、１度目は 30 センチほどの鰆１匹を 25 元、マテ貝（シャミセン貝とも言う）を 26 元で買った。鰆は煮つけにし、マテ貝は中華鍋で熱し、フタが開いたところに醤油と日本酒を振りかけた。申し分無く美味しかった。（上の左の写真）。２度目はザーサイ（３元）とワタリガニ（50 元）を買った。ワタリガニは 10 月と比べるとかなり大型だった。マンゴスチンも量り売りで６個、購入したが、うち２個の中身は傷んでいて食べられなかった。目利きが必要だと痛感した。

12 月にはカニをひと山 40 元で買った。上海ガニと同じく、汽水域に生息する泥ガニかと思った。カニの身ではなく、カニ味噌を食べるものである。中華鍋に入れておくと逃げ出してしまうので、すぐに塩茹でにして、昼食として賞味した（上の右の写真）。

市場の裏にある豆腐屋を教えられていたが、ようやく、湯気の立っている出来立て豆腐を買うことが出来た(2元)。醤油を掛けて食べたが絶品だった。

今回は図らずも「食レポ」中心になってしまった。「南戴河海滨市场」バス停の先は、さしたる観光ポイントもないので、次回は 22 路バス終点の「北戴河鉄道駅」までと、駅の周辺の案内になる。　　（続く）

新型コロナ・オミクロン株流行下の移動

写真と文／四姑娘山自然保護区管理局特別顧問
大川健三

2021年4月号「健康コード取得騒動記」と2022年１月、3月号「迫り来る新型コロナ」の続編です。四川省成都市と周辺の新型コロナ病毒は、春節明けの２月末からオミクロン株がポツポツ出始めて収束せず、３月初めには私が住むマンションが有る団地でも全員 PCR 検査を受けました。検査会場はマンションから歩いて5分位の所にある地区役場の広場で、３つ設けられた窓口で大勢を手際よく次々検査していました。私も並びましたが10分余りで検査を終え費用は無料でした。検査結果は翌朝には健康碼の下の画面に陰性が表示されていて安堵しました。また4月初めには上海と成都を結ぶ高速鉄道の車掌が感染していた事が判って危機感が高まりました。成都ではずっと外出を自主的に減らす緩い規制ですが、省外や国外から入って来る人は厳しく検査しています[注1)]。また４月に入って、近隣地域の四姑娘山や丹巴等が成都等との行き来を禁止しました。しかし食料等の生活物資は普段通り流通供給されています。

そして労働節を控えた 4 月末、オミクロン株感染者は未だポツポツ出続けているものの、四姑娘山や丹巴等では規制を少し緩めて、24 時間以内の PCR 検査陰性証明が有れば成都から入れるようになりました。そのため私は仕事が溜まっている丹巴を経由して四姑娘山へ移動する事にしました。

■5月3日 PCR 検査：常設の検査場は市内の彼方此方に有りますが、私はマンションから散歩がてら20分位の所に在る四川省医院で何時も（４回目になります）PCR 検査を受けています。昨年12月に検査を受けた時は費用が60元で結果が出るまでに丸１日待ちましたが、その後費用も待ち時間も減って、この時は費用が28元で結果が出るまで半日でした。結果は陰性で、外国人は智能手機（スマホ）の四川省医院専用の画面に表示されます。

通信大数据行程卡：GPSにより２週間以内の移動経路が表示されます

健康証明：PCR検査結果の表示画面

■5月4日移動：荷物が多いので友人が運転する乗用車に乗せて貰って成都から甘孜蔵族自治州に在る丹巴へ向かい、州境の二郎山隧道出口に設けられた検問所で健康碼・行程碼の緑色と24時間以内 PCR 検査陰性証明をチェックされました。医者らしい宇宙服のような白い防護服姿の中年と若い2人の女性が細かくチェックしていました。この時、検問所脇の窓口の周りに乗用車5～6台が停まり10人位が並んで何事か手続きしていました。後で聞いた所によると、彼らは PCR 検査陰性証明を持ってなかったので此処で PCR 検査を受け、検査結果が出るまで数時間待って陰性ならば自分の車で山麓へ下り、陽性ならば麓の施設へバスで移送され隔離観察されるそうです[注2)]。夕方に丹巴へ着き町に在る県立病院（県医院）へ直行して PCR 検査を受けました。これは検査の検出確度が100％に及ばないので、念を入れて検査するそうです。四川省医院と同様に玄関脇に検査する場所が有りましたが、此方は県内に住んで居る人の場所で、私のように成都から来た人は県医院の建物内部で検査を受けました。費用は県側の都合なので無料でした。検査の後、町の中に在る家へ戻り（車で５分位）通常の生活を始めました。検査の結果が出たのは夜中で7時間位後でした。結果は陰性で健康碼の下の画面に表示されました。以前と変わった健康碼と PCR 検査結果の表示画面を添付写真に示します[注3)]。

写真の健康碼の二次元コードの左下に在る“核酸検測結果査詢”をクリックすると検査結果が表示されます。私の様な外国人向けにも電脳系統（コンピューターシステム）の改造が進んでいる事を頼もしく感じました。

■5月9日ワクチン接種３回目：接種出来る日が昨年と違って月曜日と火曜日だけ

になっていたため50人位の行列が出来ていて、半分以上が接種が後回しになっているお年寄りでした。私も30分位並びました。接種記録は、昨年9月の時は接種して間もなく智能手機の健康碼に表示されましたが、今回は7時間位後でした。１週間余り丹巴に滞在して溜まっていた仕事を済ませ、5月13日に東隣の四姑娘山が在る小金県へ行く事にして[注4)]、12日に県医院の玄関脇で PCR 検査を受け[注5)]陰性証明を取りました。丹巴県も小金県も低リスク地区なので移動する時に PCR 検査は不要な筈ですが、私は外国人なのと感染者が出て急に陰性証明が必要になるかも知れない事を心配して念を入れて検査しました。その検査が終わって家に戻る途中、県医院から100m 位離れたホテル街で交通止めに遇いました。何事かと見ると警官が立ち並ぶ結界の20m 位向こうに救急車が停まり医療関係者らしい宇宙服のような白い防護服姿の人が数人歩き廻って消毒しているようでした。こんなに近くで感染者が出たのかと不安に思いながら帰宅しましたが、不安的中で夜7時過ぎになって当局の緊急通知が出て（防疫班の方々夜遅くまでご苦労様です！）、成都から来た人と接触者に感染者が出たため州境を跨いで小金へ行く場合は当局の許可が必要になりました。

更に明日も感染が拡がり小金側でも入境検査が厳しくなってホテル待機しなければならないかも知れないので、無理に移動許可を取らず小金県(四姑娘山)への移動を延期しました。この１か月位で以前の状況へ戻った訳で、オミクロン株の手強さを思い知らされました。

同時に、小さい町の眼と鼻の先で感染者が出て健康碼や行程碼が初めて緑色から黄色や赤色になるかも知れない状況に陥り不安感が高まりました。また丹巴は人口5000人位の小さな町なので、私は其処で数人の感染者が出ると[注6)]町を厳重に閉鎖せざるを得ないのではないかと考え、家内に「明日の朝、食料を買い出しに行こう」と提案しましたが、家内は「未だ大丈夫、もっと深刻な状況になっても私が傍に居るから大丈夫」と諭されました。確かに小さな町では親戚親友関係が密で助け合う事が多く、身内の農家から食料も調達出来ますので、言われる通りだと思いました(奥地での生活は家内に負う所が多い事に改めて感謝！)。翌朝、それでも私は不安感が収まらず一人で当面の食料を青空市場や超市へ買い出しに出掛けましたが、町の中の雰囲気は市場でも通りでも何時もと変わらずのんびりしていて（マスクを掛けてない人も半分居ました)、多少なりとも食料を纏め買いして運んでいるのは私だけでした。その後何度か町へ買物等に出掛けましたが、普段と変わらない様子でした。

地域閉鎖から3週間が過ぎ、端午の節句[注7)]の連休も無事に明けて、期待通りオミクロン株感染者が居なくなり丹巴県でも小金県でも)48時間以内の PCR 検査陰性証明が有れば出入り出来るようになりました。そこで6月9日に県医院の玄関脇で PCR 検査を受けて陰性証明を取り、10日に県境の小金県側でチェックを受けた後、四姑娘山へ無事に移動できました。

■注釈

1) 当地だけでなく外国へ求める感染対策も厳しくなっています。4月20日から中国への EMS 小包が不可になり、5月30日から新型冠状病毒感染者は回復後2か月間は中国へ入れなくなっています。

2) 長距離バスなら切符を買う時に PCR 検査を告知され、乗車時に陰性証明をチェックされますが、彼方此方の道路から入って来る乗用車の中には検問所に着いて初めて事情を知る(インターネットで検索すれば判るのですが)ケースが有る様です。

3) 四川省医院は以前から使っている自前の医療システムに新型コロナの処理を早くから組み込んだので未だ健康碼に統合してないようです。丹巴県医院は以前から州共通の医療システムを使っていて、此方は健康碼に統合したようです(昨年のワクチン接種記録も健康碼に統合されていました)。

4) 州境を２回跨ぐ「金川～丹巴～小金」の路線バスが運休していました。1日当たりの乗降客は100人位居ますので、オミクロン株の広がりを抑制する対策の一つのようです。

5) 費用は、今回の PCR 検査は自分の都合なので有料ですが8元でした。成都では28元でしたので、少数民族地区の住民(私は住民の一人の配偶者)は優遇されているようです。またその後の5月25日には、成都での費用が16元に値下げされました。

6) 人口10万人当たりに直すと50人、人口1000万人の成都ですと5000人に相当しますから安心してられない数字なのですが、症状が軽いので一昨年や昨年のように焦らないのかも知れません。

7) 農業歴の端午節５月５日は春節・清明節・中秋節と並んで当地の4大節日です。今年の端午節は太陽暦６月３日(金)で３連休でしたが、新型冠状病毒のために人出は少なかったです。丹巴では出入に当局の許可が必要で、四姑娘山では48時間以内の PCR 検査陰性証明が有れば出入りできますが自粛ムードで観光客は僅かで、お蔭で新しい感染者は出ませんでした。

「中日辞典」からの意外な発見その11

河野公雄

前回(5月号)からの続きです。1992年に「小学館」から発行された、北京・商務印書館との共同編集による「中日辞典」にある、日:中という記号が付いた語を取り上げています。この記号は、漢字で対応する日本語がある場合、その意味・用法の違いを補充説明するというものです。中国語学習者にとって役に立ちそうなものをピックアップしています。

【料理 liàolǐ】 処理する．切り盛りする．**料理家务** liàolǐ jiāwù/家事を切り盛りする．**孩子们已经能自己料理生活了** háizimen yǐjing néng zìjǐ liàolǐ shēnghuó le/子供たちは自分のことが自分でできるようになった．

日本語の「料理：りょうり」は“**菜** cài”、「料理する」は“**烹调** pēngtiáo”“**烹饪** pēngrèn”“**做菜** zuòcài”などを用いる．「魚を料理する」「肉を料理する」は“**做鱼** zuòyú”“**做肉** zuòròu”、「日本料理」は“**日本菜** rìběncài”．ただし、台湾では「料理」の意味で“**料理**”を用いることも珍しくない．

【旅行 lǚxíng】 **旅行する**．**旅行指南** lǚxíng zhǐnán/ガイド・ブック、旅行案内書．

“**旅行**”は泊まりがけの旅行をさし、日帰り旅行は“**一日游** yírìyóu”や“**游览** yóulǎn”を用いる．**去天津一日游** qù Tiānjīn yírìyóu/天津へ日帰りの旅行をする．また“**旅行**”は名詞であると同時に動詞でもあるので、そのまま動詞“**做** zuò”の目的語に立てて“**做旅行** zuò lǚxíng”などとは言えない．“**做**”を用いるときには必ず“**旅行**”の前に連体修飾語をつけ、たとえば“**做长途旅行** zuò chángtú lǚxíng”(長旅をする)とか“**做为期十五天的旅行** zuò wéiqī shíwǔtiān de lǚxíng（15日間の旅をする)のようにする．

“**做长途旅行**”とは言えるけれど“**做旅行**”とは言えない、このような語も要注意ですね。

【满腹 mǎnfù】 腹にあふれんばかり．胸いっぱい．**满腹心事** mǎnfù xīnshi/胸にいっぱいの心配事．心配事がいっぱいある．**牢骚满腹** láosāo mǎnfù/不平不満だらけである．

日本語の「満腹：まんぷく」は“**吃饱** chībǎo”という．**我已经吃饱了** wǒ yǐjing chībǎo le/もう満腹だ．

“**满腹**”に似た言葉に“**满怀** mǎnhuái”があります。“**怀**”は「懐」に相当する簡体字で、「胸が…でいっぱいである」という意です。**满怀雄心壮志** mǎnhuái xióngxīn zhuàngzhì/大望雄志が胸にあふれている．**激情满怀** jīqíng mǎnhuái/感激の気持ちが胸にあふれる．というように“**满腹**”に比べて、良いイメージですね。

【盲点 mángdiǎn】 〈生理〉盲点．視神経が網膜に入ってくる部分で、視覚を生じないところ．

日本語の「盲点：もうてん」の「うっかりして見落としている点」の意味はない．**法律的漏洞** fǎlǜ de lòudòng/法律の盲点．**钻搜查的空子** zuān sōuchá de kòngzi/捜査の盲点をつく．

中国語の“**盲点**”は医学の専門用語として使われるだけのようです。

【迷惑míhuo】 1.惑う．迷う．戸惑う．**感到迷惑不解**gǎndào míhuo bùjiě/何が何だかわからずに当惑してしまう．2．惑わす．**任何花言巧语也迷惑不了他** rènhé huāyánqiǎoyǔ yě míhuo bùliǎo tā/どんな甘言も彼を惑わすことはできない．

日本語の「迷惑：めいわく」の意味では用いない．**添麻烦** tiān máfan/迷惑をかける．**受到打扰** shòu dào dǎrǎo/迷惑を受ける．**骚扰短信** sāorǎo duǎnxìn/迷惑メール．**占道停车** zhàndào tíngchē/迷惑駐車．**对这种令人讨厌的行为可不能袖手旁观** duì zhèzhǒng lìng rén tǎoyàn de xíngwéi kě bùnéng xiùshǒupángguān/このような迷惑行為を黙って見すごすわけにはいかない．

【勉强 miǎnqiǎng】 1.**無理に強いる**．**如果不愿参加，我们也不勉强** rúguǒ bùyuàn cānjiā，wǒmen yě bù miǎnqiǎng/参加する気がないのなら、われわれも無理強いはしない． 2.**なんとか頑張っている**．**勉强吃了一点** miǎnqiǎng chīle yīdiǎn/なんとか少しばかり口に入れた． 3.**いやいやながら**．**他总算勉勉强强地同意了** tā zǒngsuàn miǎnmiǎn qiǎngqiǎng de tóngyì le/彼はついにしぶしぶながらも承知した．

日本語の「勉強：べんきょう」とは意味が異なることに注意．学習する意味での「勉強する」は“**学习** xuéxí”“**读书** dúshū”“**用功** yònggōng”、「値引きを

する」場合は“**少算** shǎosuàn”などを用いる．**埋头学习** máitóu xuéxí/こつこつ勉強する．**这次失败，让我学到了很多东西** zhècì shībài，ràng wǒ xué dào le hěn duō dōngxi/今回の失敗はとてもいい勉強になった．**能再便宜些吗** néng zài piányi xiē ma?/（買物で）もう少し勉強してよ．

“**学习**”“**读书**”は「学習」「読書」に相当する簡体字です。

【莫大 mòdà】 これ以上はない．なによりの．無上の．**莫大的光荣** mòdà de guāngróng/無上の光栄．**莫大的幸福** mòdà de xìngfú/この上もない幸せ．**莫大的悲哀** mòdà de bēiāi/最大の悲しみ．

もとは「…より大なるは莫(な)し」の意味．日本語の「莫大：ばくだい」は、そこから意味が転じたもので非常に多いことを意味し、“**巨大** jùdà”“**庞大** pángdà”“**极大** jídà”などを用いる．**蒙受巨大的损失** méngshòu jùdà de sǔnshī/莫大な損害を被る．**准备花巨额资金做广告** zhǔnbèi huā jùé zījīn zuò guǎnggào/広告宣伝に莫大な費用をかける．

【贫弱 pínruò】 貧窮し衰微する．**这个国家由贫弱的国家变成了一个富强的国家** zhège guójiā yóu pínruò de guójiā biànchéng le yíge fùqiáng de guójiā/この国は弱小国から強国へと変わった．

“**贫弱**”は日本語の「貧弱：ひんじゃく」とは異なり、国家や民族についていうことが多く、「みすぼらしい」の意味は含まない．日本語の「貧弱」は以下のように表現する．**瘦弱的体格** shòuruò de tǐgé/貧弱な体格．**光是面包和饮料的简陋的饭菜** guāng shì miàn bāo hé yǐnliào de jiǎnlòu de fàncài/パンとドリンクだけの貧弱な食事．**考题很难，我这点儿贫乏的知识，实在是力所不及的** kǎotí hěn nán,wǒ zhè diǎnr pínfá de zhīshi，shízài shì lìsuǒbùjí de/試験問題が難しく、私の貧弱な知識では歯が立たない．

【平和 pínghé】 1.（性質または言葉が）穏やかである．**他尽量把话说得很平和** tā jìnliàng bǎ huà shuō de hěn pínghé/彼はできるかぎり穏やかな言葉遣いで話した． 2.（薬の性質が）ゆるやかである．**药性平和** yàoxìng pínghé/薬の性質が穏やかである． 3.（紛争が）収まる．**风波逐渐平和下去了** fēngbō zhújiàn pínghéxiàqu le/トラブルがだんだんと収まってきた．

日本語の「平和：へいわ」は、普通“**和平** hépíng”という．**希望和平解决** xīwàng hépíng jiějué/平和的な解決を望む．**决不允许威胁和平的行为** jué bù yǔnxǔ wēixié hépíng de xíngwéi/平和を脅かす行為を許してはならない．

“**平和**”の形容詞用法は、その使用範囲が狭く、人の性格・言動や薬物の性質にしか用いないということです。

【评判 píngpàn】 （勝敗または優劣を）判定する．審査する．**评判员** píngpànyuán/審査員．（スポーツの）審判員．**评判商品质量** píngpàn shāngpǐn zhìliàng/商品の品質を審査する．

日本語の「評判：ひょうばん」は以下のような言い方をする．**评价好** píngjià hǎo/評判がよい．**现在很受欢迎的小说** xiànzài hěn shòu huānyíng de xiǎoshuō/いま評判の小説．

「審判員」と関連して、日中同形語の“**审判员** shěnpànyuán”を調べると、“**审判**”は「審理と判決（をする）」という法律用語で、“**审判员**”は「判事・裁判官」のこと。更に、“**裁判员** cáipànyuán”を調べると、「審判員・アンパイア」とあります。日本語の「審判：しんぱん」と「裁判：さいばん」との関係が逆ですね。

今回はここまでにしておきます。

前回、許雪華さんの「日中同形語の量的分析」という発表について紹介しました。日本の『新明解国語辞典（第五版）』と中国の《**现代汉语词典**（第五版）》から、12,681 語の日中同形語を抽出、二字語が約 94%（11,918 語）を占めているという話をしました。今回は、語数が多い日中同形語にはどんな語があるのかをちょっと見てみましょう。最も語数の多いのは七字語で「第一次世界大戦」「第二次世界大戦」の 2 語。六字語は「高分子化合物」の 1 語、五字語は「本初子午線」「無機化合物」「電子計算機」など 15 語。四字語は「一目瞭然」「半信半疑」などの四字熟語と「唯物史観」「神経衰弱」など合わせて 243 語、三字語は「精神病」「脳出血」「北極圏」など 502 語となっています。こうしてみると、語数が多い日中同形語のほとんどは専門用語や固有名詞であり、そのため同形同義語の割合が多くなっていると言っています。三字以上の日中同形語 763 語をみると、その約 98%が同形同義語であり、二字語の比率よりはるかに高いとしています。そして、後半には、日中同形語の品詞性について述べています。興味のある方は、是非、ネットで読んでみてください。

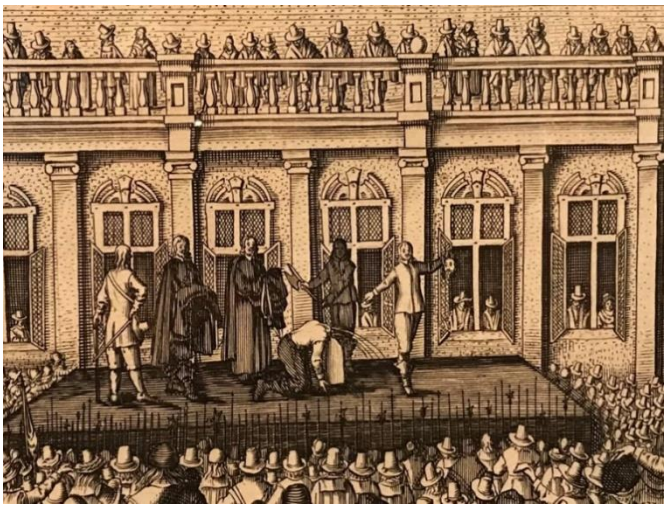
「東西の峻厳な二人の革命家」（2）

和田　宏

『議会の役割』

クロムウェルは、ケンブリッジ市に近いハンティンドンに生れ、ケンブリッジ大学に学び、ロンドン法学院に籍を置いたあと、28 歳で庶民院議会（衆議院に相当）の議員となった。1628 年、議会は、チャールズ１世に対して『権利の請願』を突き付け、議会の承認なしに課税しないこと、法律によらずに国民を逮捕しないことを要求した。しかし、父・ジェームズ１世を真似て「王権神授説」を振り回すチャールズ１世は、議会を無視して一方的に解散、11 年間議会を開催せず、ピューリタンを弾圧した。ところがチャールズ 1 世は、自ら招いた対スコットランドの戦費や多額の賠償金を議会に求めるため、止むを得ず 1640 年議会を招集。しかし、議会は、何人もの良心的なリーダーを死に追いやったチャールズ１世の圧政の象徴である星法院や高等宗務裁判所の廃止を決めた。王の勝手な増収策としての船舶税、トン税、ポンド税、騎士強制金など議会の同意なき課税も禁止された。チャールズ１世の側近やカンタベリー大主教ウィリアム・ロードを弾劾し、処刑した。

このように当初議会側は、国王の専制政治を終わらせ、全面勝利を収めた。ところが、1641 年議会が国王の悪政を列挙し、国王の任命権を制限する新たな改革を訴えた「大抗議文」を僅差で可決したのに対して、チャールズ１世は 1642 年１月、自ら護衛兵を率いて議会に乗り込み、急進派議員を捕縛しようと実力行使に及ぶ。



チャールス一世の処刑（ウィキペディア所載）

とうとう、王はロンドンを退去して戦争準備を整える。これに対して議会は、民兵を組織する議案を可決し、軍事・宗教上の一切の権力を議会の手に収めることを発表、ここに国王と議会は武力をもって争うことになったのである。

『聖者の進軍』

1642 年 8 月 22 日イギリスは、国王派（騎士党）と議会派（円頂党）に割れて内戦（The Civil War）に突入。当初の２年間は、国王側が戦局を有利に展開させた。軍事的な経験のある貴族が指揮官であり、騎兵を主体とする国王軍に比べて、議会軍は素人のジェントリが率いる地方ごとの民兵主体だったからである。しかも議会軍の内部では、国王に楯突くのをためらう長老派と、徹底抗戦を主張する独立派の対立もあって方針がグラグラしていた。“これではダメだ。”と思ったのがクロムウェルである。彼は、熱心なピューリタンを集めて騎兵隊を作った。戦いの目的を知っている鞏固な精神的集団だ。

『兵士の教理問答』というパンフレットには戦いの目的が何であるか判り易く書いてあった。

一つ、私は戦う。国王を教皇派（カソリック）の手から救い出すために。

二つ、私は戦う。我が国の法律と自由のために。恣意的で専制的な政府を実現しようと長い間務めて来た人達によって今や崩壊の危機に瀕している。

三つ、私は戦う。我々の議会を守るために。

四つ、私は戦う。真実のプロテスタント信仰を

守るために。今やそれは抑圧されようとしている。

汝の敵は誰か。

神は次のような理由で彼らを成功させることはないであろう。

一つ、彼らのその大部分は、教皇派であり、不信心者であるから。

二つ、彼らの大部分は、この世において最も恐るべき不敬の言をはく連中であるから。

三つ、彼らは、神の敵であり、それ故に神は彼らを追い散らすであろうから。

クロムウェルの軍隊は、軍規も厳しく、当時の戦争にはつきものだった兵士達の略奪行為や賭け事、飲酒を厳罰に処した。戦略会議は祈祷会であり、戦闘前夜は将兵全員が神に祈りを捧げたのである。兵士は、『兵士のための携帯聖書』をポケットに入れて戦場に臨んだ。そして次のような讃美歌を歌いながら進軍した。

“神は我らに名誉を与えはじめ
　聖者は進軍していく
　　剣は鋭く矢は速く
　　バビロンを打ち壊すために”

クロムウェルの兵士達の心に根をおろした革命の大義であり、自らを聖者の軍隊に他ならないという確信である。クロムウェルの騎兵隊は、集団の隊列を崩さず完全に一体となって命令一下、右に左に動き、何度も敵陣に突撃を加える鉄の軍隊だった。チャールズ１世の甥リュイパート王子がクロムウェルの軍隊を鉄のような強固な軍隊だと言ったことから、クロムウェルの騎兵隊は“鉄騎隊(Ironside)”と呼ばれるようになった。

鉄騎隊のニュー・モデル軍は、マーストンムーアの戦い、ネースビーの戦いで国王軍を破り、ついに議会軍が勝利を手にし、1646 年 6 月 20 日、国王軍は降伏、国王チャールズ１世は軟禁された。

ところが、イギリスを共和制にするか立憲君主制にするかなど政治体制や国王の扱いを巡って議会派は、①「長老派（立憲君主制支持)」、②「独立派（共和制、クロムウェルも含む)」、③「水平派(男子普通選挙で庶民の政治参加)」の３つの派閥に分裂した。

この派閥争いの混乱に乗じて、チャールズ１世は、1647 年 11 月逃げ出し、スコットランド軍を扇動してイングランドに進攻させた。これをクロムウェル軍が 1648 年８月迎え撃って勝利し、チャールズ１世を再び捕らえた。

二度、三度と戦争を仕掛け、大勢の人々を死に追いやったチャールズ１世は、反逆者、殺人者、国家に対する公敵などの罪に問われた。1648 年末、議会の裁判にかけられることになったが、クロムウェル派の軍人が 1648 年 12 月６日、200 人程いる庶民議員のうち、国王に同情的な長老派などの議員 140 人を実力でパージしてしまった。残る 60 人程の独立派を中心とする議員で国王裁判の委員会が作られた。

1649 年１月 20 日裁判が始まり、27 日国王を死刑とする判決が言い渡された。死刑執行に賛成したのは 59 人だった。クロムウェルは先頭を切って賛成の署名をし、続いて残る 58 人がサインした。

1649 年１月 30 日は一面に霜が降りた寒い朝だった。“殉教者”を自認するチャールズ１世は、首を切られる恐怖でブルブル震えていると思われたくないので、厚着をした。ホワイトホール宮殿の前に断頭台が仮設され、衆人環視の中、国王チャールズ１世は台に登らされた。

四つん這いにさせられる直前、チャールズ１世は、先導したヘッカー大佐に、“この台は低い。もう少し高いものはないのか？”と注文したが、聞き入れられなかった。

黒装束、黒覆面をした屠殺業あがりの死刑執行人が斧を振り降ろし、血の滴る首を掲げて観衆に見せながら、“Traitor-！(裏切者！)”と叫んだのである。

午後２時４分過ぎであったと伝えられている。

中国・陰暦の行事―日中の違い（その3）

寺西俊英

今回の「陰暦の行事」は、7月～9月の分です。

■7月――

★七夕節、中国では乞巧節（きっこう）（旧暦7月7日）

5節句の一つ、7月7日は、日本では「七夕（たなばた）」といい、幼稚園や小学校の行事として、更には商店街のお祭りとして、盛んに行われていますが、中国では「七夕（qī xī）」と言う名称は廃れています。その代わり、「乞巧節（qǐ qiǎo jié）」として細々と伝えられているようです。

中国の伝説では、天帝の娘・織姫は機織りが上手で、毎日化粧もせずに機織り機の前で布を織っていました。そんな娘を可哀そうに思った天帝が、牽牛との結婚を取り持ちました。結婚した二人は深く愛し合い、仕事を放り出して、毎日遊び暮らしました。

そのため、天界では布が不足し、牛が痩せ細って牛車を曳けなくなりました。怒った天帝は、二人に以前のように仕事をさせるため二人の仲を引き裂きましたが、二人は悲しんで、益々仕事が手に付きません。天帝は仕方なく、仕事を一所懸命することを条件に、一年に一度、二人が会うことを許しました。それが七夕の日だったのです。今年は8月4日です。

中国では、織姫の技術にあやかりたいと、女性たちが針仕事の上達を願う節句（乞巧節）となりましたが、日本では「一年に一度の逢瀬」というロマンチックな部分が強調されて、「七夕」として生き残りました。勿論、日本でも女性が手芸の上達を願った時期もありましたが、「実」よりも「夢」が勝ったのです。

因みに天の川を挟んで牽牛と織女を結び付ける大役を務めるのは、カササギという鳥です。この鳥は、カラス科の鳥でアジアや欧州などに分布する、全長40センチくらいの尾が長い鳥で肩と腹部が白く、その他の部分は黒色をしています。

筆者が2007年に中国・大連に赴任した時、ゴルフ場などで黒白のツートンカラーの美しい鳥を見かけたので、友人に聞くとカササギと言う鳥で中国語では「喜鵲（xǐ què）」と書くのだと教えてくれました。これがあの伝説の鳥かと感激したのを覚えています。

声はお世辞にも美声とは言えませんが、中国の人々は、「カササギの声を聞くとめでたいことがある」と言って喜びます。

■8月――

★中秋節（旧暦8月15日）

今年は9月10日です。中秋と言えば月餅ですね。言うまでもなく中国伝統のお菓子の一つ。昔、遠く離れた家族の安否を月の中に見ようとした名残です。

わんりぃは、今はコロナの関係で中止していますが、以前は料理教室で月餅を作りました。この時期の中国の店先では零れ落ちるのでは、と心配になるほどに高く積み上げて販売しています。太陽暦では9月が殆どですが10月になる年もあります。（2009年＝10月3日、2017年＝10月4日、2020年＝10月1日など）中国では、春節と並ぶ大切な祝日です。

■9月――

★重陽節（旧暦9月9日）

五節句の一。陰暦9月9日のことで今年は10月4日になります。日本では菊が咲く季節に当たり、「菊の節句」とも呼ばれていますが、重陽節を知らない人が多くなりました。陰陽思想では奇数は陽の数で、陽数の最大数である9が重なることから「重陽」と呼ばれるのはご存知の通りです。香港では、清明節に出来なかった墓詣りする日でもあります。一般には、一家で小高い丘などに登り（これを「登高」という）菊の花を飾ったり、菊の花びらを浮かべたお酒を酌み交わす風習がありました。

登高と言えば、以前漢詩の会で勉強した杜甫の「登高」を思い出します。この漢詩は杜甫が56歳の時、四川省・奉節県で詠んだものです。明代の評論家である胡応麟は〈古今七言律詩の第一〉と称賛しています。この詩は、重陽の節句を迎え台に登り自己の悲哀を詠っていて、重陽節のイメージと少し違いますね。

五節句とは、1月7日（人日）、3月3日（上巳）、5月5日（端午）、七夕（7月7日）、9月9日（重陽）です。1月が1月1日ではなく7日となった理由は、わんりぃ270号（2022年1月号）でご紹介していますのでご覧ください。

「麻生サークル祭 2022」のわんりぃ主催行事報告

吉光　清

本年度の「あさおサークル祭」が川崎市麻生市民館を会場に開催されました。“わんりぃ”は６月５日(日)視聴覚室で、恒例となった午前：「論語から学ぶ言葉の力」、午後：「ボイストレーニング（ワークショップ）」の二つのイベントを主催しました。

昨年度はワクチン接種に場所を大きく占拠されて、何処が視聴覚室か分からないような、肩身が狭い形での開催でしたが、今年度は例年通りの開催となりました。

午前の講師は、長年お願いしている、桜美林大学名誉教授植田握雄先生で、「中国語で読む　漢詩の会」でもお馴染みの語り口で、長きにわたる論語研究の蓄積と博識を分かり易く、楽しくお話ししていただきました。

初めて参加された方のために、孔子が生きた時代背景、論語の成り立ちや特徴に触れた後に、論語が価値を置く「五徳」(仁－思いやりの心、義－私欲を越えた行い、礼－礼節、礼儀、礼楽、知－叡智、信－信頼関係)について解説されました。

続いて、1.曾子曰「我日三省吾身。為人謀而不忠乎？與朋友交而不信乎？ 傳不習乎？」(学而第一の 4)、2.子夏曰「君子信而後勞其民。未信則以厲己也。信而後諫。未信則以為謗己也」(子張第十九の 10)、3.子貢問政。子曰「足食、足兵、民信之矣」。子貢曰「必不得已而去。於斯三者、何先？」曰「去兵」。子貢曰「必不得已而去。於斯二者、何先？」曰「去食。自古皆有死。民無信不立」(顔淵第十二の 7) という３篇が取り上げられました。

印象に残ったのは「『三省』とは日に三度ではなく、『何度も何度も』という意味、『忠』は単に『上に背かない』ということではない」というお話。

「リーダーたる者、信頼を得るためには、コンプライアンスが無ければダメです、ウクライナ侵攻なんてとんでもない」と現代批判も健在でした。

途中出入りもありましたが、約 14 人が熱心に聴き入りました。お話が終わると、先生に熱心に質問された参加者もいらっしゃいました。

～～～～～～～～～～

午後のエメ講師による「ボイストレーニングで健康と歌唱力を！」は、室内の机・椅子をすべて隅に寄せ、体を存分に動かせるように、全員で大きな円を作って始まりました。

「論語」のお話をしてくださる植田先生

開口一番に仰言ったことは、「人間という楽器から良い音を出すには身体の状態を整えなければなりません」でした。その言葉通り、発声練習とは程遠い、身体エクササイズが始まりました。さらに、手を振って余分な力を抜き、「ハハハハ」の笑い声によって、腹筋を使用する準備、自分の声が響き易い頭の位置の確認と続き、身体状態を整えてから、手話付きの「夢で逢いましょう」の歌唱を指導していただきました。

最後には３つのパートに分かれたアンサンブルの練習が気持ち良く決まりました。用事のため途中で帰られた２名を加えて参加者は 14 名でしたが、皆さん、歌うこと、声を出すことが、どんなに気持ちと体をすっきりさせるものなのかを実感された様子でした。最後に、エメ先生から皆さんに CD のお土産をいただきました。

両イベントとも、次回は、もっと PR に努め、もっと大勢の方に参加いただきたいと思いました。それと、今年度は料理室を使ったイベントを主催されたサークルが２つありましたので、個人的には、「わんりいの料理教室」も、ぼちぼち再開を計画して欲しいなと思った次第です。

◇満柏画伯の漢訳俳句◇

朝顔に釣瓶とられてもらい水

加賀千代女

qiān niú huā kāi rào jǐngshéng
牵牛花开绕井 绳
wú nài jiè shuǐ qù lǐng jiā
无奈借水去邻家

【わんりぃの催し】
皆様のご参加を歓迎します

♫ ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！
身体の力を抜いて気持ちよく発声しよう！
声は健康のバロメーター！！
＊動きやすい服装でご参加ください。

- 会場：まちだ中央公民館　美術工芸室
- 日時：7 月 19 日(火) 10：00～11:30
  8 月 23 日(火) 10：00～11:30
- 講師：Emme［エメ］(歌手)
- 会費：1,500 円（講師謝礼・会場費）
- 定員：15 名（原則として）
- 申込：☎042-735-7187（鈴木）

～～～～～～～～～

❀❀ 中国語で読む 漢詩の会 ❀❀

漢詩で磨く中国語の発音！ 中国語のリズムで読んで漢詩のすばらしさを味わおう！

- 会場：まちだ中央公民館　視聴覚室
- 日時：7 月 24 日（日）10：00～11：30
  8 月は休講
- 講師：植田渥雄先生
  桜美林大学名誉教授
- 会費：1,500 円（会場費・講師謝礼）
- 定員：20 名（原則として）
- 申込：☎090-1425-0472（寺西）
  Email:ukiuki65jpjp@yahoo.co.jp
  (有為楠)

■7 月・8 月定例会　代表宅

▼7 月 7 日（木）13：45～
▼8 月 12 日（金）13：45～

■ ‘わんりぃ’発送　三輪センター

▼8 月は休刊
▼9 月号　発送日未定

☆☆ 編集後記 ☆☆

気が滅入るようなニュースが多い昨今ですが、2020 年 12 月には、「はやぶさ２」が、2014 年 12 月に打ち上げられて以来 6 年、52 億kmに及ぶ旅を終えて、小惑星「リュウグウ」から採取した貴重なサンプルを地球に落として、再び更なるミッションを受けて、宇宙の彼方へ飛んで行くという、夢のあるニュースがありました。

最近になって、「はやぶさ２」が地球に運んでくれた「リュウグウ」の砂の分析を担当した複数の研究所から、今までの研究成果が発表され、ニュースになっています。

分析によると、「ハヤブサ２」がもたらしたサンプルから、「リュウグウ」に水が存在した痕跡と、生命誕生に繋がるアミノ酸が発見されたそうです。地球以外にも生命体を育む星が存在するかも知れないと想像すると、ワクワクしてきますね。

～・～・～・～・～・～

‘わんりぃ’は、新入会をいつでも歓迎します
年会費：1800 円、入会金なし
郵便局振替口座：00180-5-134011 わんりぃ
10 月以降の入会は、当年度会費 1000 円。
■問合せ：044-986-4195（寺西）

‘わんりぃ’275 号の主な目次

寺子屋· 四字成語 (54)『門可羅雀』……2
「日译诗词」(24)韓愈『初春小雨』……3
「漢詩の会報告」(59) 杜甫『贈李白』……4
「中原」雑感(23)河南省を回る友好提携都市……6
中国の面白い神話伝奇物語(16)『李娃伝』(中2)‥8
「秦皇島を御存知ですか(16)……10
四姑娘山写真だより(52)……12
「中日辞典からの意外な発見」(11)……14
「東西の峻厳な二人の革命家」(2)……16
陰暦の行事(その3)……18
みんなの広場……19
‘わんりぃ’の催し・お知らせ……20